アメリカ大陸は東欧ユダヤ人と先住民が出合う場所
『密林の語り部』試論

西 成彦

１．『ノストローモ』 の影

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの短篇「グアヤキル」は、次のように始まる――「わたしはもはや、プラシド湾に映るイゲロタの峰をこの眼で見ることも、またオクシデンタル州を訪れることもできないであろう」[1]。

このあと、ボルヘスは「プラシド湾」や「イゲロタの峰」や「オクシデンタル州」の謎を解き明かすべく José Korzeniovski の名前を追い討ち的に書きつけるのだが、これも事情通にとってでないかぎり、衒学的にしか見えない。どこかにありそうなスペイン語の地名と、なにやらスラヴ人っぽい人名。 話題の中心は、1822 年 7 月 26 日に港町グアヤキルで持たれたシモン・ボリバールとホセ・デ・サン=マルチンの歴史的会見なのだが、20 世紀になってラテンアメリカ史の要となる出来事をふり返るのは「エドゥアルト・ツィメルマン博士」なるユダヤ系の亡命ドイツ人だ。

もちろん、事情に通じている読者になら、冒頭に羅列された地名がジョーゼフ・コンラッドの『ノストローモ』*Nostromo*（1904）に由来することはお見通しだろう。また、Korzeniovski が、それまでロシア国籍を保有していたポーランド人の彼が英国に帰化するまでの本来の姓であったこともである（その名前は、ポーランド語では Józef Korzeniowski とつづられ、「ユゼフ・コジェニョフスキ」と読む）。

ところで、ここでラテンアメリカ文学を論じるにあたって、ボルヘスというより、コンラッドの『ノストローモ』から話を始めたのには理由がある。アメリカ大陸の文学（コロンブス以降に限定する）を大づかみにとらえるには、 ラス・カサスのスペイン語による『インディアス史』あたりから始めるのが王道だろう。しかし、その後のアメリカ大陸・西インド（アンチール）諸島には、ポルトガル語、オランダ語、フランス語、英語が続々と流れこみ、アメリカ合衆国の独立（1776）に範を得たイベロアメリカ諸国の独立後も、あたかもそれが歴史的必然であったかのように、 植民地帝国の諸言語は、そのまま新興国家の国語として採用され（フランス領・オランダ領の場合は、ハイチとスリナムを除き、いまなお政治的独立は達成されておらず、ケベ

ックはカナダ国内で半独立の状態である）、今日のアメリカ大陸文学を一望に収めるには、この五つの言語に万遍なく目配りする必要がある。

もっとも、そのなかで、世紀を経るとともに英語が果たすようになった役割を正しく図る努力は怠るべきではないだろう。パナマ運河の開鑿を画期とするアメリカ合衆国主導のパンアメリカニズムや、今日のグローバリゼーション（英語帝国主義）の浸透、あるいは中南米から北米への人口移動や頭脳流出もさることながら、たとえば、ボルヘスは、1899 年、アルゼンチンの生まれではあるものの、そもそも幼少時から英語・英文学に親しんでいた [2]。であればこそ、彼はフォークナーまで含めて、英語文学から学び取れるだけ学び取ることができたのだ。ラテンアメリカの知識人にとって、旧宗主国のスペイン（もしくはポルトガル）への依存や傾倒は自然の道理であったし、フランス語への執着は、とくに文化面ではかつてもいまも強い。しかし、これとは別の意味で、ラテンアメリカ諸国（とくにスペイン語圏）における英語・英国人（そこにはスコットランドやウェールズやアイルランド出身者も一定数含まれる）の大きな存在感は、ラテンアメリカ文学を考えるときにも無視はできない。

たとえば、このようなラテンアメリカの状況を踏まえつつ、現代アルゼンチンを代表する作家のひとり、フアン・ホセ・サエールは、「外からの視点」と題するエッセイのなかで次のように書いた。

> わたしたちの文学の大半は――その起源から、しかしとりわけ一九世紀と二〇世紀初頭――外国の言葉、たとえばドイツ語、英語、フランス語、イタリア語で外国の人たちによって書かれてきた [3]。

このエッセイは、1940 年代から 1950 年代のブエノスアイレスで、独自の存在感を誇ったヴィトルド・ゴンブローヴィッチを顕彰し、そのポーランド語による小説や日記（ラテンアメリカの友人たちとの共同作業による『フェルディドゥルケ』*Ferdydurke* のスペイン語訳を含む）を「アルゼンチン文学」の内部に位置づけようとしたものである。思うに、サエールには「ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語」ばかりではなく、新移民の言語としてのポーランド語（や、場合によってはイディッシュ語や日本語）をまでそこに付け加えたい欲望にとりつかれていた。現代アルゼンチンの知的風土のなかでは、ラテンアメリカ文学史を、スペイン語で書かれたものに限定することを狭量なものとして退ける傾向が徐々に幅を利かせつつある。

しかし、ラテンアメリカ文学を考えるにあたって、諸「外国語」のなかでも群を抜いて大きな影響力を示す英語については、そのときにも別格の扱いが必要なのだ。英語は、アメリカ大陸文学の文学史を構成すべき一言語の地位にとどまるものではなく、

その影響力は、なによりも大英帝国の「知のグローバル化」（およびそれら諸国の独立後に起こった人口移動と資本の転移）にまつわるものとして強化されていったからだ。それこそ、チャールズ・ダーウィンからウィリアム・ハドソンを経て、近いところで言えば、ブルース・チャトウィンへと至る広い意味での博物誌や紀行文を抜きにして、アルゼンチンやラテンアメリカ一般の文芸史を語ることは、やっぱり狭量なイベロアメリカ中心主義と言わざるをえないだろう。そして、こと小説に限定した場合、『緑の館』*Green Mansions*（1904）のハドソン以上に、『ノストローモ』のコンラッドに目をつぶることは、自殺行為に等しいのである。

コンラッド自身のアメリカ体験は、彼（ユゼフ・コジェニョフスキ）が船乗りになることを夢見て郷里のロシア（今日のウクライナ）をあとにして 、フランスの商船に乗り組み、二度ばかり大西洋を横断した十代後半の一時期にかぎられ [4]、たとえ架空だとはいえ、ラテンアメリカのとある港町（彼はそれをスラーコと名づけた）を主要な舞台とする『ノストローモ』と書くにあたっても、彼はもっぱら文献を渉猟するにとどめ、あとは想像力の飛翔にまかせたのだった [5]。この意味で、『ノストローモ』をラテンアメリカ文学と呼ぶことには、まがりなりにもブエノスアイレスで書かれたゴンブローヴィッチの『トランス=アトランティック』*Trans-Atlantyk*（1952）をそう呼ぶかどうかということ以上に、慎重でなければならないのかもしれない。

しかし、19 世紀以降のラテンアメリカ世界をふり返るときに、スペイン語（やポルトガル語）話者の多さを強調するあまり、ヨーロッパ大陸（さらには英領インドや清国＝中国、日本）から殺到した移住者や、ダーウィンのような一時滞在者・通過者の表現活動を軽視することは、どう考えても誤りだ。そして、こう考えたとき、『ノストローモ』は、それが英語という「外国語」で書かれているということ以上に、ラテンアメリカの一独立国で英語が果たしていた役割を明示的に示しているという意味で、重要なのである。『ノストローモ』に内在するこの先駆性について、わたしは次のように書いたことがある。

> コンラッドはコスタグアーナの英語という限定的な「外国語」の輪郭と運命を、スペイン語やイタリア語といった言語との隣接関係のなかで浮き彫りにしたのだといえる [6]。

コスタグアーナの公用語は、ラテンアメリカ諸国の多くと同じくスペイン語のはずである。ところが、これはまさに船乗りとしてカリブ海地域の港町を転々とした若き日のコンラッド自身の記憶と印象に基づくものであったに違いないのだが、彼は小説のなかで、英国人（もしくは英国系コスタグアーナ臣民）、および国家統一期のイタリアから流れ着いたイタリア系の新移民に対し、集中的に光をあてている。「ノスト

ローモ」の名で呼ばれる若き闘士もまたジェノヴァ生まれの船乗りだった。したがって、かりに何語で書かれていたとしても、この小説が多言語空間を前提にした小説であることは動かせない事実であり、彼はただそれを大英帝国の言語で書いたにすぎないのだ。

アルゼンチンを代表する国民文学『マルチン・フィエロ』*El gaucho Martín Fierro*（ホセ・エルナンデス著、1872）をはじめとするラテンアメリカのスペイン語文学のなかで「グリンゴ」gringo の姿は、先住民族のそれに劣らず、欠かせない構成要素のひとつだが、20 世紀初頭のコンラッドは、言ってみれば、「グリンゴ」の言葉で、自分たち「グリンゴ」と現地スペイン語使用者（＝クリオーリョ）が縺れ合うようにして生きたラテンアメリカ史のひとこまを活写しようとした。そして、小説に登場する「グリンゴ」には、サンフランシスコから商用でやってくるアメリカ人や、ドイツ語混じりのスペイン語を話すユダヤ人までもが含まれ、小説全体は港町を舞台に据えた作品ならではのマルチリンガルなスケールの大きさを示している。

『ノストローモ』をラテンアメリカ文学として読もうというとき、コンラッドがすでにラテンアメリカ諸国に開花しつつあった現地の文学をまるっきり黙殺していたという事実は、ある種の障害になるだろう[7]。また、港町スラーコと密接に結びついた南米奥地の銀山ではたらく先住民労働者に、しっかりとした肉づけを施さないという姿勢は、その後の「インディヘニスモ」を経由することで大きく成長した今日のラテンアメリカ文学を考えた場合、致命的かもしれない。しかし、そうしたいくつかの弱点を補ってあまりある、きわめて重要な特徴が、この小説をラテンアメリカ小説のひとつの「古典」たらしめている。少なくとも、ラテンアメリカの多言語隣接状況を前提にした「世界文学」を試みたというコンラッドの目論見それ自体は、正当に評価されるべきである。コンラッド自身、ラテンアメリカの現地文学に対する礼儀をこそ欠いてはいたかもしれないが、20 世紀のラテンアメリカ作家のなかには、『ノストローモ』をラテンアメリカ文学の「古典＝規範」のひとつとして受け止めようとする作家が登場する。「グアヤキル」のボルヘスがそのひとりだったとするなら、現代ペルーを代表するマリオ・バルガス=リョサは、さらなるひとりである。

２．『密林の語り部』と「グリンゴ」たち

バルガス=リョサが『密林の語り部』*El hablador*を完成するのは、1987 年のことだが、彼自身、語っているように、その契機となったのは、1958 年に行われたアマゾン地域への調査旅行であり、そこでの先住民族との出会いもさることながら、決定的な意味を持ったのは「米国人の言語学者」との出会いであったということらしい[8]。彼

は、ペルー国内の先住民族を小説の素材とするうえで、「米国人」の存在をどうしても欠かせない要素だととらえたのだ。しかも、彼は物語をアメリカ大陸の内側に封じこめはしない。

小説の冒頭で、作家バルガス=リョサの分身ともいえる話者＝主人公は、いまフィレンツェにいる。しかも、滞在の目的のひとつは「ペルーとペルーの人々を忘れるため」[9]であったという。その結果、フィレンツェを描いた場面では、各所にイタリア語が「外国語」としてちりばめられることになる。「もちろんですわ。どうぞ、どうぞ」（p. 10）というわけだ。

ところが、そうやって受付の女性にいざなわれながら入っていった画廊で彼が見出すのは、イタリアの「写真家」が「ペルー東部の〔中略〕アマゾン地方を二週間旅行したときに撮った」（同前）という一連の写真だった。主人公は「ペルーとペルーの人々」を「忘れる」どころか、いわば「抑圧されたものの回帰」に全身全霊を揺さぶられることになる。その「抑圧されたもの」というのは、彼自身が若き日以来、何度か接触を持ったことのあるマチゲンガ族の記憶であるとともに、それと分かちがたく結びついたひとりの個性的な「語り部」hablador（p. 14）の面影だった。

彼がフィレンツェの画廊で強烈な印象とともに想起するひとりの「語り部」とは、かつてサン・マルコス大学在学時に親交を結んだ「赤毛」で、「顔の右半分を完全に覆う葡萄酢のような暗い紫色の痣のある」青年だった。あだ名はマスカリータで、本名をサウル・スラータス（Saúl Zuratas）といった。

彼はかつてその自宅に招かれたことがあり、彼はそこで、父親ソロモンを紹介されて、そのソロモンが「ロシアかポーランド訛りの強いスペイン語を話す」（p. 17）ことに驚く。老人は、1930 年代にペルーへ流れ着いた移住者で、ひとまずは地方都市タララで旅の荷を解き、身を粉にしてはたらいた。ところが、そこで「一儲けし、ある日、リマに移り住む決心をし」てからというもの、とつぜん、その「ユダヤ教が昂じてきた」（p. 16）というのである。他方、サウル（＝マスカリータ）の母は、「タララで暮らしていた田舎娘」で、その母をサウルは「ぼくたちのあいだでは異教徒と言う」のだと言い（ここでのサウルはユダヤ人社会を「ぼくたち」と呼んでいる）、信仰をまたいだ二人の結婚には大変な困難があった。しかも夫のユダヤ教回帰が理由だったのか、「彼女は一家がリマに出てきた二年後に亡くなって」（p. 18）しまったのだという。これらの記述から分かるのは、サウルの父、ソロモンの「ロシアかポーランド訛り」とは、正確にはイディッシュ訛りだと考えるべきだということだ（その場合、Zuratasという姓も、旧大陸では、Zlataという、スラヴ語で「黄金」を意味する東欧ユダヤ人にありがちな名前であった可能性が高い）。異教徒と結婚した父親が家庭内でイディッシュ語を用いたとは考えにくいが、リマに出てきてからの彼の「ユダヤ

教への回帰」が、東欧イディッシュ語使用社会への部分的回帰でもあったことは想像にかたくない。ペルーは、アルゼンチン、チリ、あるいはブラジルなどと比べると、東欧ユダヤ人社会の規模は小さかった[10]。しかし、1960 年に亡くなった彼は、おそらくは本人の希望でもあったのだろう、「コロニアル通りのユダヤ人墓地に眠っている」（p. 256）。

バルガス＝リョサは、ペルー国内の少数派であるマチゲンガ族の物語を書くにあたって、「米国人の言語学者」ばかりでなく、東欧ユダヤ人移民と、その息子を登場させることによって、はじめて小説の輪郭を固めることができたのである。先住民の語彙を大量にちりばめる小説ではあるが、べつにそうした特殊語彙を「イタリック」にはせず、アマゾン低地特有のペルー・スペイン語として処理するバルガス=リョサは、反面、「異教徒（ゴイエ）」や「移住（アリアー）」などのユダヤ・イスラエル的な語彙を、イタリア語と同じ「外国語」として可視化させながら、小説を書き進めた。

もちろん、この小説における「外国語」のプレゼンスは、単にイタリックで示されたイタリア語や、イディッシュ語・ヘブライ語に限定されるものではない。

まず、バルガス=リョサは、「後記」で明記しているように、「ウルバンバのドミニコ会伝道所」（p. 337）関係者からスペイン語を介した先住民伝承の収集を行っているほか、主人公にフランスに留学させたこととも絡め、オーストリア生まれの探検家シャルル・ヴィーナーのフランス語による仕事に触れるなど、マチゲンガの口頭伝承を小説に取り入れるにあたって、スペイン語の資料をひもとくだけでは足りなかったことを強調している（p. 113）。

そして、なにより、バルガス=リョサは、小説執筆の動機のひとつとなった「米国人の言語学者」を送りこんできた夏季言語学研究所（SIL）に関して、その国内での否定的な風評まで含め、たっぷりとページを割いている。

まず、第一のグループは、彼らを「科学的調査という言葉を隠れ蓑にして、情報活動をし、アマゾンの原住民のあいだに新植民地主義的な文化の浸透をはかるアメリカ帝国主義」のにおいを嗅ぎとる、「とくに左翼」であった。

第二に、彼らを「言語学者をかたるプロテスタントの伝道者の一派だと非難」する「カトリック教会のある宗派」。

第三に、「研究所は原住民の文化を毒し、西洋化を企て、市場経済に統合するものだとして攻撃」する一部の「人類学者」。

そして、四番目が「民族主義あるいはスペイン伝統主義」の立場から研究所の活動を批判する「保守派」だった（p. 99）。そして、バルガス=リョサは、彼らは「金で買おうとするから、注意したほうがいい」と主張する歴史学者にとって、「研究所の

活動によって密林の原住民がスペイン語よりも英語を話すのを学ぶことが、おそらく耐えがたかったのである」と、主人公に語らせている（p. 100）。

もちろん、敵もさるもので、「聖書」を原住民の言語に翻訳し、その改宗を最終的な目標に置く彼らではあったものの、少なくとも、言語教育のレベルでは「二言語の教師」maestro bilingüeの養成に努め、英語だけでなく、スペイン語を教授することで、ペルー・ナショナリズムとの折り合いをつける配慮を怠っていなかった[11]。

じっさい、であればこそ、この小説のなかで主人公に数々の情報をもたらすアメリカ人言語学者の夫婦（＝シュネイル夫妻）は、主人公に向かって、破綻のないスペイン語で話しかけ、マチゲンガ族の「語り部」をあらわす「ケンキツァタツィリラ」なる言葉をスペイン語に置き換えるに際して、苦し紛れに「スピーカーズ」los *speakers*という英単語（p. 236）を口走ってしまう程度である。

しかし、夏季言語学研究所は、アメリカ合衆国に本拠を置き（1950 年代以降、その教育分野はノーマン市にあるオクラホマ大学が引き受けた）、かりにその活動が「二言語」によって行われていたとしても、そのメンバーの大半が英語ネイティヴであったことは動かしがたい事実である。じっさい、ともに「オクラホマ大学で学位を取得」したシュネイル夫妻は、アマゾン低地で夫婦での布教活動を開始して間もなくに、子どもを授かった。そして、二人はその子どもを「そこで育てよう」と考えていた（p. 118）のだが、二十年以上の歳月を経て二人に再会した主人公は、かつて夫人のお腹のなかにあった子どもがいまでは立派に成長して、「アメリカ合衆国に住んでいる」という話を聞くことになる。シュネイル一家は、スペイン語を話しはしても、まったくペルーには同化していない。彼らの家庭ではマチゲンガ族の言葉が「二番目の言語」で、その息子の場合も、そのマチゲンガ語能力は「スペイン語以上」だったという（p. 217）。つまり、この小説は、イディッシュ語やヘブライ語に比べてさえ、テキスト内には英語が顔を覗けない作品だが、しかし、同じ小説が、「スペイン語」をただ実用のための言語としかみなさず、ペルーにおける内なる先住民語と、母国語である英語さえあれば、生きる目標は達成できるとでも言わんばかりの「外国人＝グリンゴ」に大きな役割を割りふっているのである。

つまり、『密林の語り部』は、リマのサン・マルコス大学で親しくしたサウル・スラータスの足跡を執拗に追いかける役割[12]がペルー人のスペイン語使用者にあてがわれた結果として、なんのぶれもなくスペイン語で書かれているのだが、もしもシュネイル夫妻のいずれかが、同じ趣向で物語を試みたとしたら、それは九分九厘英語で書かれていたはずの内容なのである。

バルガス=リョサの分身である主人公は、学生時代にはマルクスやマリアテギに傾倒していたものの、1980 年代になると、アンデス高地から活動の中心をアマゾン低地

へと移しかけていた、たとえばセンデロ・ルミノーソの活動たちに対しては遠い失望感を覚えていた。そんなペルーの一知識人が、ある種の「多言語・多文化主義」的なペルー・イメージを構築するためにこの小説を書いたのだとすれば、これはあくまでもペルーの「国語」で書かれた一種の規範的な「国民文学」の範疇におさまってしまう。しかし、夏季言語学研究所の活動に照準をあてつつも、「グリンゴは伝道者ほどにもマチゲンガ族のことがわかっていないんだ」（p. 129）と、その活動をだれよりも激しくこきおろしたサウル・スラータスに伝説的な役割を授けようとしたバルガス=リョサの「多言語＝多文化主義」の射程は広い。そして、その射程を広げるためにバルガス=リョサが用いた仕掛けが、まさに「ユダヤ人」という表象、もしくは特権的な機能なのである。

アマゾン先住民の世界にとりつかれたサウルの「回心」を、「暗い紫色の痣（あざ）」に結びつけて説明しようとする主人公に向かって、サウルは「父に言わせると、ぼくは、アマゾンのインディオと、常に少数で、宗教や社会のほかの人々と異なる風習のために、常に迫害されてきたユダヤ人社会とを重ねている」ことになると言って、「君のフランケンシュタイン症候群〔中略〕より、ずっと高尚だと思わないかい？」と反撃を加えた（p. 42）。

そして、後にふたたび、そんな過去の論争をふり返りながら、「君は柔軟性のないインディヘニスタだよ」と言い、「ペルーの最後のインディヘニスタがユダヤ人であるなんて、滑稽だぜ」と笑う主人公に対しても、サウルは、「少数派の文化が存在していく権利を守るのに、ユダヤ人以上にふさわしい人間は、ほかにいない」と言い放つ（pp. 135-6）。「会堂（シナゴーグ）に行くのは、ドン・ソロモン〔＝父親のこと〕を失望させないためだ」（p. 136）というのが、言わばその口癖ではあったものの、彼は父親から敬虔なユダヤ教徒としての信仰心を受け継がないまでも、「ユダヤ人」としての自己解釈は、確実に受け継いでいたのだ。

そして、時を経て、主人公はペルーのテレビ局で、「バベルの塔」（なんと多言語主義的！）という企画に関わるようになる。そのころ、サウルとの連絡は途絶え、彼がイスラエルに「帰還＝移住（アリアー）」したらしいという噂を聞いていたこともあり、その存在について思い出すことが少なくなっていたのだが、そうしたなかで、主人公は二十年近くの歳月を経て再会したシュネイル夫妻の口から驚くべき証言を耳にする。

時代とともに、マチゲンガ族のなかにも一定のヒエラルヒーができあがり、「村長」に相当する人物に至っては「スペイン語を流暢（りゅうちょう）に喋（しゃべ）る」（p. 221）ところまで時代は進み、後戻りがむずかしくなりつつあった。そんな現実を目の当たりにした話者は、「聖書、二言語の学校、福音の指導者、私有財産、金銭の価値、商業、洋服」（p. 222）といった「近代」がマチゲンガ族のなかに不可逆的に浸透していくこ

とを、体を張ってでも阻止しようと考えていた「最後のインディヘニスタ」のことを、思わず想起せずにはおれない。

そして、かつてシュネイル夫妻から耳にしたことのある「アマゾンという海に漂うマチゲンガ族の小島から別の小島へと渡るように、逆境をものともせず密林を巡礼する語り部」（p. 236）のことを思い出して、そこに話の水を向けた主人公は、シュネイル氏よりも「赤毛で」、「髪の色がにんじんのように赤いので、私たちは白子（アルビノ）とかグリンゴとか呼んでいた」（p. 247）という男についての最新情報を手に入れるのである。かつてサウル・スラータスが、夏季言語学研究所の言語学者たちのことを貶めて「グリンゴ」と呼んでいたことを思い出してほしい。つまり、ここでくり広げられているのは、ペルー生まれの平均的なペルー人を前にして、「グリンゴ」がべつの「グリンゴ」を「グリンゴ」として罵り、なかばせせら笑うようにこきおろす光景なのだ。しかも、「語り部」がマチゲンガ族の言葉で「休みなく、間をとらず、切れ目もなしに」（p. 259）まくしたてるさまに、マチゲンガ族の人垣に混じって、合衆国生まれの言語学者が興味津々耳を傾けている。もし主人公がその現場に居合わせたとしても、その「膠着語（こうちゃくご）の捻髪音（ねんぱつおん）」（p. 333）が耳障りで、彼は語りを楽しむどころか、とても内容を聴き取り、味わうことなどできなかっただろう。

19 世紀の後半、ペルー・チリ・ボリビアのあいだで争奪の対象となった硝石、東南アジアでの生産に追いつかなくなるまでは少なくとも世界市場を独占したアマゾン流域の天然ゴム、今日では化石燃料、そういったグローバル商品を求めて、大きな資本が投下されるのを尻目に、かつて伝道の先頭に立ったイエズス会やドミニコ会の活動を肩代わりするかのように新しく登場した人類学者や言語学者は、グローバル化の最前線へと追い詰められつつある先住民社会のなかで、思惑と思惑をぶつけあい、現地で鉢合わせをくり返す。そんなとき、彼らはかならずしも 19 世紀に成立した国民国家の言語で会話をするわけではない。それこそ、彼らは、そらぞらしくも、絶滅の危機に瀕した先住民族の言葉で会話を交わしたりしさえするのである。

コンラッドの『ノストローモ』が先駆的であったとすれば、そこでは英国生まれイタリア育ちの女性と、イタリア人亡命者がコスタグアーナの港町でくり広げるイタリア語のやりとりや、英国留学経験のある現地女性とサンフランシスコから来た商人とが英語で会話したりする光景を、これでもかというほど前景化したことにあった。だとすれば、かりにコンラッドが先住民族の言語に関して、まったく無知であり、それどころか無関心であったとしても、それこそが 19 世紀末から 20 世紀初頭のラテンアメリカにおける現実の一側面であったことを浮かび上がらせたその「世界文学」的手法は、まさに 1930 年代を頂点とするインディヘニスモ、そしてその後の人類学者や

言語学者の介入を経て、 新たな形式とともに『密林の語り部』のなかで甦ったと言ってもいいのではないだろうか。

バルガス=リョサの最新作『ケルト人の夢』*El sueño del Celta*（2010）は、1910 年代、コロンビア・エクアドル・ペルー・ブラジルにまたがるアマゾン河上流のプトゥマヨ河流域で勃発したスキャンダルを聞きつけ、赴任地のリオデジャネイロから現地調査に急行したアイルランド系の外交官、ロジャー・ケースメントの生涯に焦点をすえた作品である。そういえば、『密林の語り部』のなかでも、バルガス=リョサは、そうした後の小説の構想を先取りするかのように、近代を先導した覇権的な英語帝国主義の犠牲となって絶滅の危機に瀕していたアイルランドの「聖話者シャナーヒー」seanchaíの存在を呼びさましていた（p. 224）。ラテンアメリカという大陸に集まったひとびとは、それぞれにさまざまなヨーロッパ言語（あるいはアフリカやアジアの言語）を言語遍歴の根っこにひそませながら、時としては、ユダヤ人やアイルランド人がそうであったように本国をもたない「ディアスポラ」の民としての運命を背負いつづけていた[13]。ケースメントはその「プトゥマヨ報告」をあくまでも大英帝国の議会への提言を目標として執筆したわけだが、ひょっとして、彼は「少数派の文化が存在していく権利を守るのに、アイルランド人以上にふさわしい人間は、ほかにいない」と心のなかで豪語していたかもしれない。そんな彼は、第一次世界大戦が始まってからやたら不審な行動が目立つようになり、最後はアイルランド独立運動を支援するために敵国ドイツと密通した廉で国家反逆罪に問われ、1916 年 8 月ロンドンで公開処刑にされる。

ヨーロッパ人マイノリティーに属する存在を「国民文学」のなかにしかるべく配置する、こうしたバルガス=リョサの手法は、「多言語多文化主義」的な国家像を打ち出そうとする、言ってみれば、優等生的な善意のあらわれだという批判はありうるだろう。しかし、ラテンアメリカ世界での夏季言語学研究所の活動が事実上幕を閉じるまさに 1987 年に発表された小説のなかで、その活動をも含め、一連の「グリンゴ」たちのプレゼンスに目を向けたその選択は、『ノストローモ』に秘められた潜在的な可能性をめぐる、ラテンアメリカ・ナショナリズムの側からの「横領＝応用」であったとは言えないだろうか。

さらに、バルガス＝リョサは、学生時代のサウルが、カフカの『変身』（それは 1938 年に刊行されたボルヘス訳の『変身』*La Metamorfosis* であったと考えられる）を丸覚えにするほどのカフカ信者で、「回心」をとげ、「語り部」となってからも、「蝉」への「変身」を経験したみずからを「グレゴリオ」（p. 277）と名のらせるほどのこだわりようで、「世界文学」としてのカフカを効果的に使っている。これもサウルを「半＝ユダヤ人」として設定したことの波及効果だろう。

いずれにしても、『密林の語り部』は、マチゲンガ族という少数民族にひとりのペルー人が素手で向かい合うことの困難さをいさぎよく「告白」する作品であった。そして、その困難さを克服するためにバルガス=リョサが敢えて用いたのが、「グリンゴ」たちの存在だった。『ノストローモ』が、世界資本主義に冒されつつあるラテンアメリカの港町を舞台にした、群がる「グリンゴ」たちの生態をスペクタクル的に描く小説であったように 。

３．先住民の養子となったユダヤ人

じつは、『密林の語り部』が刊行される前年、北米では第二次世界大戦後の代表的なユダヤ系英語作家、バーナード・マラマッドが亡くなっている。ブルックリン生まれの移民二世だが、『修理屋』*The Fixer*（1966）では、帝政ロシア時代のウクライナで冤罪事件に巻きこまれたユダヤ人を正面から取り上げるなど、同時代のユダヤ系英語作家のだれよりも、みずからのルーツにこだわり、しかも、移民一世のイディッシュ訛りの英語を、ことさらに再現しようとする執念にもとりつかれていた作家である[14]。そして、そのマラマッドが完成寸前まで書き進めながら、惜しいところで志を果たせなかった小説があり、死後刊行の『ピープル族』*The People*（1989）がそれだった。“People”に相当するスペイン語の“Pueblo”がアメリカ先住民の名前であることをもじって、19 世紀末、アイダホからモンタナにかけての居留地に追いこまれながら、さらには再定住を迫られた先住民をかりに「ピープル族」と名づけてみせたわけである。そして、ユダヤ系アメリカ作家は、この先住民のあいだで「族長」にしたてあげられるユダヤ系の新移民（greenhorn）の物語として、その小説を構想した。

ペルーにおいてであれば、20 世紀の後半になってからも、国家に同化しない先住民族が一定数存在したわけだが、それよりもはるかに先住民族に対する暴力や同化圧力の強烈だったアメリカ合衆国では、19 世紀の末が、ある意味でまさに山岳先住民族にとって瀬戸際となる時代だった。そんななか、アイダホ州ポカテロのミッションスクールで英語教育・宗教教育を施され、かなりの英語運用能力を身につけた老族長が、たまたま町で勇敢なふるまいを見せたというだけで、「イディッシュ訛り」（p. 3）で「舌ったらず」（p. 27）の英語しか話せない新移民のヨジプに、部族の未来を託するという賭けに出る。「ピープル族」の族長は、かならずしもヨジプを「ユダヤ人」と見越して、彼に白羽の矢をあてるわけではない。大半が自分たちに歯を向いてかかってくる白人たちに対して、対抗できるのは、ヨジプしかいないと直観的に見て取るのだ。

そうこうするうちに、彼は部族の言葉を習得し、「ロシア語に比べれば、簡単だ。あの難しいロシア語だって話せるようになったくらいなんだから」（p. 38）と前向きに考える。

もっとも、彼は、部族を代表して、ワシントン DC まで派遣されたものの、そこではほとんどとりあってもらえず、「このうすらとぼけたヘブライ・インディアンさん」（p. 33）とからかわれるだけで、期待された対外交渉の面では無力だった。しかし、それでも先代の族長の死後は、部族を率いて、長い逃避行に出るリーダーシップを発揮する。ユダヤ人の彼には「住むのはどこだって同じ」という感覚がしっかりすりこまれてはいたが、「自分にはいまだにそんなふうに考える自分に恥じを覚えた」（p. 16）。

しかし、ヨジプは、「ピープル族」と運命を共にするなかで、まさに部族の「ディアスポラ」は、ユダヤ人のそれに等しいと感じる。19 世紀の末といえば、ヨジプの郷里であったロシア領の、とりわけウクライナ周辺で「ユダヤ人襲撃（ポグロム）」の横行した時代だった。なかには集落（シュテトル）ごと追いたてを食らうこともあった。そして、小説は、逃避行のさなか、追撃の軍勢との戦闘になり、ヨジプ自身が囚われの身となり、若い部族の仲間からも愛想をつかされるところで途切れている。

しかし、さいわい、その後に書かれる予定だった残りの 4 章についても、メモだけは残されており、そのメモによれば、部族と離れ離れになったヨジプは、シカゴでバッファロー・ビルの「ワイルド・ウェスト・ショー」の団員募集に応じ、そこで「白いインディアン」White Indian の役を演じる。そして、その後、はれて合衆国の市民権を獲得した彼は、正義感に目覚め、夜学で法律を学ぶ。少数民族の権利を守るためだ。そして、最後は、かつて逃避行のさなか、たがいに心を許しあった元族長の娘と夢のなかで再会して昂ぶりを覚えた彼は、かつて東欧ユダヤ人のあいだで強い影響力をもったハシディズムの踊りに興じて、恍惚感に浸るエンディングになる予定だった（p. 98-99）。

ところで、この展開は、どこかカフカの『失踪者』*Der Verschollene*（1927）を思わせる（カフカの主人公が入団する「オクラホマ劇場」が「ワイルド・ウェスト・ショー」でなかったとはだれも言い切れない）。カフカには初期の短篇に「インディアンになりたい気持ち」Der Wunsch, Indianer zu werden と題するものさえある。マラマッドがそうしたカフカを念頭において小説を構想していた可能性は十分にある。

東欧ユダヤ人のアメリカへの同化は、かならずしもアメリカ諸国のマジョリティへの同化という形をとるわけではない。バルガス=リョサやマラマッドが試みたのは、むしろアメリカ諸国の「国民国家」の支配に屈しようとしている、あるいは労働力の搾取よりも何よりも、生産手段や資源の収奪を初期目標に据えた資本主義の犠牲にな

ろうとしているアメリカ先住民族への「回心」を果たす「ユダヤ系アメリカ人」の物語だった。そして、主人公がユダヤ教への「回帰」を果たすかどうかは別として、そのことがなによりも「ユダヤ人」としてのアイデンティティを保証してしまうという物語の形がそこには埋めこまれている。

そもそも、19 世紀の後半から 1920 年代にかけての東欧ユダヤ人の移住熱が、アメリカ合衆国では、WASPを中心とする支配層と、被抑圧人種（ひとつはアフリカ系、もうひとつが先住民族系）の中間に身を置くというユダヤ系アメリカ人の自己表象を生み出してきた。芸人アル・ジョルスンや、ウディ・アレン『カメレオンマン』*Zelig*（1983）の例がもっとも分かりやすいが、1950 年代末のヒッピー・ムーヴメントの登場を受けて、作家ノーマン・メイラーは、かねてから白人内の差別表現としてあった「白い黒人」White niggerという差別語を逆手に取る形で「ヒップスター」＝「白い黒人」という定式化を試みた。彼自身はそのなかで「ヒップスター」の一翼を担った「ビートニク」のなかにユダヤ系が多いことに少しだけ言及している[15]ものの、彼自身が東欧ユダヤ系であるということもあって（その父親は南アフリカからの転住者だった）、ことさらにその点を強調することはしていない。しかし、1950 年代の合衆国といえば、ソール・ベローやマラマッドら、一群の「ユダヤ系作家」が頭角をあらわした時代であった。また、性的な充足を追求するヒッピーたちの源流をつきとめようとしたときに、D・H・ローレンスやヘンリー・ミラーと並んで、ウィルヘルム・ライヒの名前を落とすわけにはいかないのだった[16]。そうしたことから見ても、カウンターカルチャーの台頭と、ユダヤ系知識人の結びつきは、当時としても否認のしようがなかった。

そして、1960 年代に入ってヒッピーたちが、アメリカ先住民のライフスタイルへの「回心」をめざすようになったとき、まさに「白い黒人」は「白いインディアン」へとシフトしていくことになるのである。1960 年代のアメリカを代表した批評家のひとり、レズリー・フィードラーは、彼もまたユダヤ系であったこともあり、そのユダヤ的側面をことさらに強調することはなかったが、まさにアメリカ合衆国の「西部文学」の系譜を論じた『消えゆくアメリカ人の帰還』*The Return of the Vanishing American*（1968）では、「スクエア」なアメリカ人に対抗するヒッピーたちを「西部」的な世界の担い手として位置づける。そこで、フィードラーは、「アメリカ人」の心に巣食う「インディアンの魂」をめぐって、こんなことを書いてみせた。

> 東欧のユダヤ人の子孫であろうと、ダブリンのアイルランド人の子孫であろうと〔中略〕いやしくも自分がアメリカ人だと考える人間なら、だれしも体内に第二の魂――インディアンの魂がうごめくのを感じる[17]。

そして、英語圏北米文学の歴史をたどりつつ、同書の後半で、カナダ出身のユダヤ系作家（後のシンガーソング・ライター）であるレナード・コーエンの『美しき敗者たち』*Beautiful Losers*（1966）を究極の「西部文学」のひとつとして取り上げた彼は、こんな一文に注目するのだ。

> 「新しいユダヤ人」とはだれだろう。
>
> 「新しいユダヤ人」はおのれの精神を優美に喪失する。〔中略〕彼は歴史をくり返して研究することで記憶喪失を引き起こしてしまい、しかも彼のその健忘症は、見て分かるほどに熱狂して彼が受けいれるさまざまな愛撫を受ける。〔中略〕彼は時にはユダヤ人らしくなることもあるが、ともかくもつねに、いかにもアメリカ人らしいのだ。〔中略〕[18]

フィードラーがとらえた「アメリカ人」のなかの「新しいユダヤ人」的な側面は、メイラーが唱えた「ビートニク」のなかの「白い黒人」的側面とともに、20 世紀後半のユダヤ系アメリカ文学を構成する主要な素材のひとつになっていた。そういった流れのなかであれば、いつ『ピープル族』のような作品が「アメリカ作家」によって書かれたとしてもおかしくなかった。そこでは、ペルーを舞台にして、東欧系ユダヤ人の二世が未同化先住民の「語り部」として、離散した部族のあいだをつなぐ存在として生きようとする物語を構想するよりもはるかに、その機運や土壌が早くから熟していたからである。

『密林の語り部』がそうであったように、『ピープル族』もまた、実話というよりは、作家個人の想像力の産物であっただろう。そこでの「ユダヤ人」表象はあまりにも安易だと映るかもしれない。しかし、アメリカ大陸という場所は、まさに「ユダヤ人」という存在様式がそのような形で「先住民族」の表象と接合するトポスとして存在したのだ。こうした定型へのもたれかかりは、決してユダヤ系作家の独壇場ではなかったし、非ユダヤ系作家の偏ったユダヤ人観の投影でもない。それは、ユダヤ民族とアメリカ先住民族が相似だという認識の定型化ではない。アメリカ先住民族の運命のなかに、ユダヤ人（それはケルト人の末裔であってもいい）こそが自分たちの運命を見てしまうのであり、かりにそのユダヤ人がユダヤ教を放棄したとしても、アメリカ先住民の追いつめられた運命に、みずからを写し取ったとたん、彼はそこに「ユダヤ人」以外の何者でもない自分を見てしまうのだ。

バルガス=リョサはこうした同時代の「ユダヤ系アメリカ人」の神話を『密林の語り部』のなかで巧みに応用・展開してみせた。夏季言語学研究所のキリスト教徒たち

には、何年かかってもたどりつけそうになかったアメリカ先住民への接近法を、彼はレナード・コーエンのいう「健忘症」に結びつけて題材化したと言ってもいいだろう。

この文脈では、かならずしもヨーロッパでユダヤ教徒であったものだけが、アメリカで「ユダヤ人」でありうるわけではない。ただ、ユダヤ人としてのディアスポラを生きている移民と、その末裔こそが、より高い確率で「ユダヤ人」である自分に目覚めたということは確かである。バルガス=リョサは、サウル・スラータスを造形するにあたって、そのからくりをおおっぴらに活用したのだ。

４．終わりに：『偉大なるシングー』へ

本論考は、現時点ではまだまだ試行的なものである。たとえば、ブラジルでは 1997 年に『偉大なるシングー』*A majesdade do Xingu*という作品が、東欧ユダヤ人移民二世のモアシル・スクリャールによって書かれ、その小説はまさに「ノエウ・ヌテウス」という、ブラジル先住民の医療・厚生・権利回復に心血を注いだ「ブラジルのシュヴァイツァー」とでもいうべき実在の医師をモデルにしている。この小説は、東欧ユダヤ人の話者が 1917 年のロシア革命後、内戦状態となったウクライナで、赤軍兵士として進駐してきた騎兵隊の一員であった、後の作家イサーク・バーベリに馬に乗せてもらった過去を、牛乳屋テヴィエばりの饒舌さでふり返るなど、まさに 20 世紀小説の、とりわけユダヤ系世界文学のパロディーとしての色彩が強い。そうしたなかで、かつて移民船のなかで若き日のノエウとのあいだに友情を培った、同じく東欧ユダヤ人の話者は、ブラジルに来て心のなかに目覚めたアマゾン先住民に対する「親近感」afinidadesについてこう語る。

> おれは連中みたいにベーリング海峡経由で来たわけじゃない〔中略〕けど、隔世遺伝というわけでもないが、少なくとも心理的には一体感を覚える[19]。

そして、たとえば、次のようにアメリカ先住民と新移民である自分たちを重ね合わせてみせるのだ。

> 連中だって、侵入者だったんだ。猿（マカコ）たちにとって侵入者だったし、蟻にとっても侵入者だった。（p. 103）

こうした語りに組みこまれる形で、先住民族の医師であり、コミュニストでもあったノエウの波乱に富んだ生涯が語られていく。

ペルーがそうであったように、20 世紀に入ってクーデタが相次いだブラジルにおいても、コミュニストとして生きることは、単に「インディオたちの医師」として生きる以上に苦難の道を意味した。しかし、スクリャールは、東欧ユダヤ人とアマゾン先住民との友情と連帯を語りつつ、20 世紀ブラジルの歴史の一側面を描き出したのである。

彼が決してブラジル文学に閉じることなく、とりわけ 20 世紀ユダヤ文学のさまざまな「古典」を参照しながら、これを書いたことは明らかだが、同時に、スクリャールは同時代の「ラテンアメリカ文学」として、『密林の語り部』のことをも強く意識している。たとえば、かつてゴム採集者（セリンゲイロ）だった先住民の男のひとりは、ノエウの顔を見て、「旦那はブラジル人には見えない、それはグリンゴの顔だ」と、「たどたどしい口調」で話しかけてくるのである（p. 127）。

かくして、『ノストローモ』を皮切りに、わが「アメリカ大陸文学史」の試みは始まったばかりだが、しかし、少なくとも、言語を越えて、アメリカ大陸の全体をひっくるめた「文学史」の可能性を多少は素描できたと思っている。そして、そのさいに、東欧系、また東欧ユダヤ系作家の英語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語（あるいはオランダ語）への言語スイッチがもたらした波状的なプロセスが、五大言語圏の文学（五つの「舌」を持った文学）を統合して考えるときのヒントを与えてくれるのではないか。ここまで書いてきて感じるのは、そのことである。

いずれ、この観点から、「ラテンアメリカのグリンゴ文学」の一翼を担ったイディッシュ作品にも目を向ける必要があるだろうと思っている。そして、さらには、北米から南米へと散らばった日本語文学にも同じような機能があるかもしれないと、たとえば、そんなふうに夢想することは楽しい[20]。

注

[1] J・L・ボルヘス『ブロディーの報告書』鼓直訳、白水社、1979、p. 139。

[2] 彼は、9 歳のときにオスカー・ワイルドの『幸福の王子』*Happy Prince* をスペイン語に訳したことがあり、その翻訳書は今日でも一般に流布している（*El principe feliz*）。

[3] フアン・ホセ・サエール「外からの視点」、久野量一訳、本誌。

[4] 『ノストローモ』の冒頭に置かれた「作者の覚書」には「一八七五年だったか、それともその翌年だったかに、西インド諸島で」聞いた「男の話」がもとになったと打ち明けているが、「陸地との接触は短期間だったし、回数も少なく、一時的だった」と補うことを忘れていない（『筑摩世界文学大系〔50〕コンラッド』上田勤・日高八郎・鈴木健三訳、筑摩書房、p. 5）。

[5] コンラッドは『闇の奥』（1899）の舞台となるベルギー王国領コンゴにも、1890 年位に渡ってはいるが、小説執筆時にはおもにアイルランド系外交官ロジャー・ケースメントの「コンゴ報告」などの文献から多くの素材を拾うことで肉づけを行っている。
[6] 西成彦『エクストラテリトリアル』作品社、2008、p. 145。
[7] 同じことは、19 世紀の末に日本を訪れて英語で日本文学を書き残そうとしたラフカディオ・ハーンの場合に関しても言える。文学史は系譜的な連続性を重視したがる。しかし、日本に比べて、アメリカ合衆国でのハーン評価は、徐々に高まりつつあり、それは「多言語的なアメリカ」に注目した、とりわけルイジアナ時代のハーンに対する評価の高まりである。以下は、そうした新しいハーン評価を含む論考のひとつである――Lawrence Rosenwald, *Multilingual America*, Cambridge Univ. Press, 2008（ただし、ここで扱われているのはアメリカ合衆国の多言語状況であって、南北アメリカにまたがる議論までは展開されていない）。
[8] マリオ・バルガス=リョサ「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」野谷文昭訳、『すばる』2011 年 10 月号、p. 155。
[9] 『密林の語り部』西村英一郎訳、岩波文庫、2011、p. 9。以下、同小説からの引用は、本文中に同書のページ数を括弧書きすることとする。なお、適宜、訳文に原語を補った箇所もある。
[10] 東欧系ユダヤ人の集住地区では、世界のどこであれ、イディッシュ語の新聞が刊行され、少なくとも一世のあいだではイディッシュ語を使った文学活動も活発であった。じっさい、ブエノスアイレスで 100 冊刊行された『イディッシュ文学古典叢書』のなかには、アメリカ大陸のイディッシュ文学もかなり幅広く拾われており、カナダ、合衆国、チリ、ブラジルで各 1 冊、そしてメキシコ・キューバ・ウルグアイでまとめて 1 冊、またアルゼンチンについては 2 冊が編まれている。しかし、そこにペルーを扱った巻はない。
とはいうものの、ペルーにおける東欧ユダヤ系移民のプレゼンスは、ペルー生まれで、いったんシオニスト少年としてイスラエルに渡った後、アメリカ合衆国に移り住み、ニューヨークに腰を落ち着けたスペイン語作家、イサーク・ゴルデンベルグの存在からも明らかである。バルガス＝リョサは、たとえば、サウルの父親、サロモン・スラーラスを描くにあたって、カトリック女性との結婚に失敗したユダヤ人移民というエピソードなど、明らかにゴルデンベルグの小説『ハコボ・レルネル氏のつぎはぎ伝』*La vida a plazos de don Jacobo Lerner*（1978）から借用している。
[11] 1877 年に来日して、北海道でおもにアイヌを対象に布教活動を行ったジョン・バチェラーは、アイヌに対する「二言語」教育の必要を知って、1889 年には『蝦和英三対辞書』*An Ainu-English-Japanese Dictionary: Including A Grammar of the Ainu Language* を刊行した。
[12] スタンレーとリヴィングストンの劇的再会の物語がひとつの原型となるのかもしれないが、奥地へとさかのぼる同胞探索の物語として書かれた『闇の奥』*Heart of Darkness*（1899）の形式は、その後、キューバのスペイン語作家、アレホ・カルペンチエールの『失われた足跡』*Los pasos perdidos*（1953）やガイアナの英語作家、ウィルソン・ハリスの『孔雀の館』 *The Palace of the Peacock*（1960）などへと受け継がれていった。見ようによっては『密林の語り部』もまたこの系譜の上に位置づけられるかもしれない。『闇の奥』はアフリカ小説であると同時に、言語圏をまたいだアメリカ大陸文学の祖形でもあるのである。
[13] 『論議』*Discusión*（1932）所収の「アルゼンチン作家と伝統」のなかで、ボルヘスはアイルランド人を論じながら「彼らにとってイギリス文化を革新するには、アイルランド人であることを自覚するだけで十分であった」と語るが、それに際して、「ユダヤ人は、ユダヤ人でない西欧人より、西欧文化を革新することが容易なのである」という経済学者・社会学者ソースティン・ヴェブレンの言葉を前ふりに用いている（牛島信明訳、国書刊行会、2000、pp. 239-240）。バルガス=リョサは若き日のボルヘスの言い分を自分流に引き受けようとしているのかもしれない。

[14] マラマッドの訳書『喋る馬』（柴田元幸訳、スイッチパブリシング、2009）の「解説」のなかで、訳者は、マラマッド作品に特徴的な「イディッシュ訛りのたどたどしい英語だからこそ生じる力強さ」（p. 250）に触れている。これは短篇「白痴が先」Idiot First に頻出する関係代名詞の破格的用法に対する指摘だが、同じ語法は『ピープル族』にも見られる。たとえば、「わたしは彼らが自分たちをピープル族と呼ぶ、そのところの、アイダホに住む一部族の一員だ」I am a member of a tribe in Idaho, which they call themselves the People（*The People and Uncollected Stories*, Penguin Books, 1992, p. 30――以下、同作品からの引用は、本文中に同書のページ数を括弧書きすることとする）。イディッシュ語の関係代名詞には、関係節内部の先行詞の構文上の位置づけを問わず"vos”で代用し、その代わりに先行詞を受けた代名詞を関係節のなかでくり返すことで主文と関係節の関係を事後的に明確にするという慣用があり、この英語のなかでは"which”の破格的な用法がこれに当たる。

[15] 「ビートニクは――しばしばユダヤ人であるが――中産階級からくる。これが二十五年前であったら、YCL（共産主義青年同盟）にはいっていただろう」（『ノーマン・メイラー全集⑤ぼく自身のための広告』山西英一訳、新潮社、1969、p. 386）。

[16] 前掲書、p. 352。

[17] 『消えゆくアメリカ人の帰還――アメリカ文学の原型Ⅲ』渥美昭夫・酒本雅之訳、新潮社、1972、p. 10。ここでフィードラーは「ながい間、ヨーロッパ人は自分たちが「西」の欠けた世界に住んでいると考えていた」（p. 29）と言い、唯一の例外が、聖ブレンダヌスの伝説を有し、「西方」に「至福の国」を思い描いていた「アイルランド人」であったとも言っている。

[18] 前掲書中の引用から（p. 185）。

[19] *A majesdade do Xingu*, Companha das Letras, 1997, p. 69――以下、同作品からの引用は、本文中に同書のページ数を括弧書きすることとする。

[20] 1989 年から 1995 年にかけて、増山朗がブエノスアイレスの同人誌『巴茶媽媽（パチャママ）』（1-6、8-10 号）に連載した「グワラニーの森の物語」は、鹿児島・樺太・ブエノスアイレス、そしてアルゼンチンのミシオネス州を経てブラジルへと渡り歩いた実在の人物、田中誠之助をモデルにした作品であり、そこにはさまざまな「グリンゴ」たちが登場する。なかでも、旅の道連れとして、ともに英語で言葉を交わし合ったひとりが、イグアスの滝のほとりで、いきなり「一管の横笛」を取り出し、「哀歓切々たる笛の音」を奏で始め、自分は「純粋に言えばケルト族であって、アングロ・サクソン系ではありません」と自分の素性を打ち明ける場面は印象的である。その後、彼は日本人の道連れに心を許したのか、英国による植民地化が進む 17 世紀のアイルランドでカトリック信仰する民衆に慕われながらも、英国によって国外追放され、最終的には南米の地へと派遣されたイエズス会士のエピソードをふり返る（同誌第 3 号、1990、pp. 44-53）。このように、南米の日本人が残した仕事のなかで、「グリンゴ」は一定の存在感を示している。それでは、彼らにとってアメリカ先住民たちはどうだったのだろうか。笠戸丸移民のひとりであった香山六郎が日本語とトゥピ語の近接性を説いた『ツピ単語集』（1951）は比較的有名だが、類似の仕事が文学作品の形でも残っていれば面白いものの、いまのところ、とくには見当たらない。なお、香山については、細川周平『遠くにありてつくるもの』（みすず書房、2008）に収められた「日本ツピ同祖論」を参照のこと（pp. 235-298）。

El continente americano es un lugar elegido para el encuentro de un judío con los indígenas

NISHI Masahiko

Durante el siglo XX en el continente americano se han producido algunas novelas interesantes como *Beautiful Losers* de Leonard Cohen, *The People* de Bernard Malamud y *A majesdade do Xingu* de Moacyr Scliar, que cuentan el encuentro de los judíos con los indígenas en el continente. En este artículo se intenta interpretar *El hablador* de Mario Vargas-Llosa dentro de ese marco. Sería fácil llamar a esa obra "una novela indigenista" escrita por la generación siguiente a José Maria Arguedas. Sin embargo, podemos añadir que es una novela judío-peruana también como *La vida a plazos de don Jacobo Lerner* de Isaac Goldemberg, porque el personaje de Saúl Zuratas, hijo de un inmigrante judío venido de la Europa del Este, es imprescindible tanto como lo es un matrimonio norteamericano, una pareja de lingüistas-misioneros. Hablando en términos generales, hay dos tipos de "gringos" interesados en la causa de los indígenas salvajes en el mundo latinoamericano: uno es el de misioneros con compasión humanista y a veces también con ambición de explotador; otro es el que se identifica con los pueblos perseguidos y ambulantes. Saúl Zuratas es un personaje típico del segundo tipo. Además, Vargas-Llosa lo caracteriza como aficionado a la *Metamorfosis*, obra maestra de Franz Kafka, cuyo protagonista está moribundo después de su inesperada transformación o conversión a un bicho-gentucilla. Hay que decir que Vargas-Llosa no podría haber conseguido esta muy trabajada novela sin la ayuda de varios personajes judíos europeos.

Considero este artículo como un piso hacia una investigación sobre la literatura del continente americano, con cinco lenguas importantes (español, portugués, holandés, francés e inglés). Pero hay que prestar atención a otras lenguas menores; las de los nuevos inmigrantes (ídish, polaco, japonés etc.) además de las de los diversos grupos de pueblos originarios. En este sentido, *El hablador* es una novela no solamente peruana sino estupendamente mundial y multilingüe, a consecuencia de presencias diversas, como los gringos que se juntan en torno a los machiguengas.